

【令和7年度 森町地域おこし協力隊インターン成果報告書】

北海道森町の関係人口創出に資するアップサイクルプロジェクト - 森町立小学校で使用されてきた道南杉天板を用いた展示台の製作 -

札幌市立大学大学院デザイン研究科
来田 玲子

1.はじめに

本アップサイクルプロジェクトは『地域おこし協力隊インターン』として、約3週間にわたり、北海道森町において実施したものである。期間中は、長期滞在による地域住民との交流および現地でのフィールドワークを通じて、森町が有する地域資源の魅力と、その背後に存在する社会的・経済的課題の把握を試みた。活動の成果としては、森町立小学校で長年使用されてきた机の天板を素材としてアップサイクルを行い、展示台を製作した。この展示台は単なる物理的な制作物としての価値にとどまらず、地域の歴史的記憶や資源循環の意義を体現するものである。完成した展示台は、2025年8月26日（火）より札幌資料館にて開催されている筆者の個展『21g（にじゅういちぐらむ）』において活用され、来場者に向けた森町の魅力発信および広報活動の一助とする。

2.インターン概要

以下の期間において、地域おこし協力隊インターンを実施した。

- 2025年7月8日（火）～2025年7月25日（金）

第1週目を「フィールドワーク調査」、第2週目を「製作に向けての準備」、第3週目を「製作」というようにインターンを3つのフェーズに分け、活動していった。

3.背景

北海道南部に位置する森町は、温暖な気候と豊かな自然環境に恵まれ、農業・林業・水産業といった一次産業を中心に発展してきた地域である。特に、ホタテやホッキ貝、スケトウダラなどの水産資源、道南杉をはじめとする豊富な森林資源、地熱を利用した農作物は町の基幹産業を支えてきた。しかし、近年、全国的な傾向と同様に、森町も急速な人口減少と高齢化に直面しており、これに伴う担い手不足が地域経済と社会の持続性を脅かしている。生産年齢人口の減少は、産業の競争力低下や地域コミュニティの弱体化を招き、地域振興策の立案・実施にも制約を与えている。こうした状況下で、町は“関係人口”の創出に向けた施策を模索しており、その一環として都市部の学生や若者を対象にした『地域おこし協力隊インターン』制度を導入している。インターンは、地域外の人材に森町の魅力や課題を直接体験してもらい、将来的な移住・定住や事業参画のきっかけを提供する重要な手段となり得る。しかし、現状では受入体制が十分に整備されておらず、プログラムの体系化や学習効果の評価、受入先と参加者のマッチング手法などに改善の余地がある。特に大学を持たない森町においては、学術的な知見や若年層との持続的な交流を確保する仕組みづくりが急務である。

4.目的

本インターンの目的は、森町の役場職員や各産業に従事する事業者、さらには地域住民との直接的な交流を通じ、現地の抱える多様な課題を総合的に把握することにある。調査活動では、農林水産業や観光業といった基幹産業の現状、人口減少や少子高齢化による労働力不足、さらには地域コミュニティの希薄化といった社会的課題について、多角的かつ実証的な情報収集を行う。その過程で、地域資源の活用可能性や、町外の人材・知見を取り入れるための方策についても検討を深める。本インターンは、“関係人口”に着目した持続可能な地域社会への方向性を提示することを重視している。特に、大学生ならではの柔軟な発想力や新鮮な視点、専門分野で培った知識を活かし、町の現状と自身の修士研究を結びつけた提案を策定することを目的とする。最終的なゴールは、調査結果と提案を体系的に整理し、森町役場に対して報告を行うことである。これにより、森町の将来に向けた新たな議論の契機を提供し、人々が協働して地域づくりに取り組むための基盤形成に資することを旨とする。

5.先行事例

アップサイクルによる地域活性化の事例として、岡山県赤磐市の除菌ウェットティッシュプロジェクトが挙げられる(図1)。規格外として廃棄されてしまう赤磐産のブドウを再活用し、環境負荷の低い生産を可能にした『アップサイクルプロダクト』だ。廃棄ブドウを原料として発酵、蒸留、精製したぶどうエタノールを使用した除菌ウェットティッシュである。現在も販売継続中であり、ふるさと納税の返礼品に起用されるなど、地域、農家双方にとって重要な収入源となっている。



(図1) 廃棄ブドウを原料とした除菌ウェットティッシュ

出典：『ITを活用した観光振興、廃棄フルーツを活用したアップサイクルプロダクトの実践』

https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/chchiikiokoshit/article/okayama.html

6.フィールドワーク調査(第1週目)

本インターンの第一段階として、北海道森町の現状把握を目的とした予備調査を実施した。具体的には、フィールドワークを通じて、森町の主要産業や地域課題に関する情報収集を行った。調査では、地熱を利用した促成栽培関連施設(図2)、鳥獣対策業務(図3)、および主要産業である木材製造を行う株式会社ハルキ(図4)、木炭製造を行う長岡木炭(図5)などを訪問した。これにより、森町の歴史的背景や産業構造への理解を深めるとともに、鳥獣被害や後継者不足といった地域が抱える課題を認識することができた。



(図2) 地熱を利用した促成栽培関連施設



(図3) 鳥獣対策業務



(図4) 木材製造を行う株式会社ハルキ



(図5) 木炭製造を行う長岡木炭

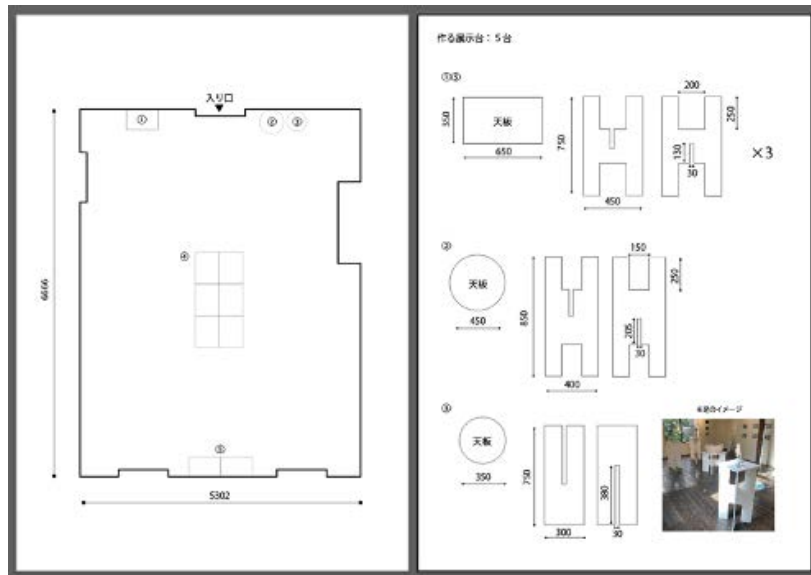
本インターンは、インターン前の事前調査や予備調査に基づき、「林業×広報」をテーマとして設定し、林業から生じる廃棄予定の端材をアップサイクルしたプロダクトを通じて、森町の魅力を町外に発信することを計画した。しかし、森町役場の方や株式会社ハルキさんのお話から、廃棄木材はバイオマス発電燃料としての再利用システムが既に確立されていることが判明した。この事実から、森町立小学校において、廃棄予定となった机の天板の活用方法が課題となっていることに着目する(図6)。これらの机は、地元の主要木材である道南杉を用いて『木育』の一環として導入されたものであり、生徒自身による年次メンテナンスが行われるなど、長年にわたり大切に使用されてきた背景がある。しかし、道南杉の材質特性上、鉛筆跡などが残りやすいという問題から、廃止が決定され、再利用の目途が立たないまま保管されていた。このような背景から、本インターンでは、森町立小学校で使われていた机の天板を展示台としてアップサイクルし、筆者の個展で活用することを目的と設定した。この一連のプロセスを詳細に記録(アーカイブ)することで、今後の地域おこし協力隊インターンシップのモデルケースを構築するとともに、展示における天板の活用を通じて、森町の魅力発信および広報活動に貢献することを目指す。



(図6) 小学校で使われていた天板

7.製作に向けての準備（第2週目）

製作は、個展における展示物の配置計画に基づき、展示台の機能性とデザイン性の両立を目指すことから始まった。具体的には、展示空間の広さ、来場者の動線、そして展示物のサイズや特性を考慮に入れた上で、展示台の形状、高さ、および配置を詳細に検討した。その結果、展示台を組み立て式として設計することで、多様な展示形態に対応可能な設計案を策定した。この段階で作成された展示台の製図は、以降の製作プロセスにおける基礎資料となった（図7）。



（図7）配置図と展示台の設計図

初期デザイン案の策定後、本インターンにおける製作プロセスの最適化と技術的課題の解決を目的として、地域協力隊の方との意見交換を実施した。意見交換では、策定された製図を基に材料である道南杉の特性を最大限に活かした加工方法、および展示台としての強度と安定性を確保するための構造について、詳細な検討が行われた。木材に精通する地域協力隊の方々から提供された助言は、初期デザインにおける潜在的な構造的脆弱性を特定し、より安全かつ効率的な製作方法へと修正する上で不可欠なものであった。この一連の議論を通じて、初期のデザイン案は技術的に精査され、現実的な形へブラッシュアップした。本プロセスは、単に製作品を完成させるだけでなく、異なる専門分野の知見と地域コミュニティの資源が融合することで、新たな価値を創造する協働モデルの有効性を示唆している。

設計図の検討を経て、展示台のプロトタイプ製作に着手した。これは、設計図上では把握しきれない実物の物理的特性や視覚的効果を検証することを目的としていた。複数のモデルを試作し、特に脚部の形状と天板のサイズについて、展示台全体の視覚的軽やかさと機能的安定性に与える影響について多角的に検討を行った（図8）。この検証プロセスにおいて、展示台に求められる要素として「軽やかさ」と「柔らかさ」が重要なデザインコンセプトとして認識された。その結果、最終的に脚部を半円状に削り抜く形態が最も適していると判断した（図9）。この形状は、初期に構想した直線的な脚部と比較して、展示台全体に流動的で柔らかな印象を与え、空間における視覚的な圧迫感を軽減する効果をもたらす。



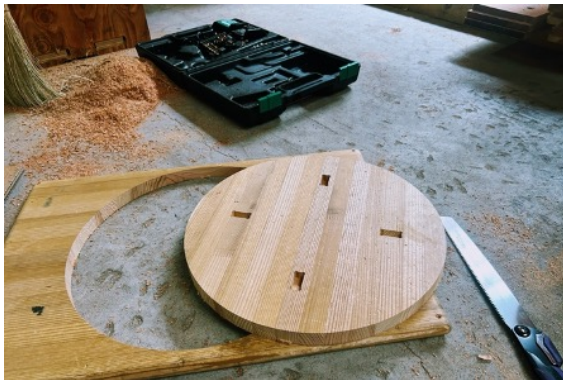
(図8) 展示台の脚の複数モデル



(図9) 半円状に切り抜く形態

8.製作 (第3週目)

最終的に決定した製図に基づき、天板および脚部に用いる木材の裁断と加工に着手した(図10)。裁断は株式会社ハルキの大型ショットボットを利用させていただいた。加工プロセスでは、道南杉でできた天板の特性や小学校で使われてきた歴史を最大限に活かしつつ、展示台としての完成度を高めていった。具体的には、使用感のある天板部と新品の脚部の色調に一体感を出すため、全体にオイル塗装を施したり、子どもたちが付けたと思われる教科シールや絆創膏をそのまま採用したりと、過去と現在の共存というコンセプトを具現化した。(図11)。



(図10) 裁断した天板



(図11) オイル塗装を行った天板と脚

また、天板の丸みに合わせるとともに展示台全体の柔らかい印象を強めるため、トリマーを用いて角に丸みを持たせる加工を行ったり(図12)、脚部に森町マークの刻印を行った(図13)。



(図12) 天板にトリマーをかけている様子



(図13) 森町のマーク

9.成果

本インターンでは、廃棄予定だった小学校の机の天板に新たな価値を与え、地域資源を創造的に循環させるモデルを確立した。長年使用されてきた小学校の机という素材が持つ歴史的痕跡を活かす、過去と現在が共存する独自の展示台である（図14）。この展示台は、アップサイクルの実践事例としても広報的資源としても大きな意義を持つ。完成した展示台は筆者の個展『21g』でも活用され、森町の歴史や文化、そしてプロジェクトの背景を来場者に伝え、町の魅力を広く発信する役割を果たす。



(図14) 完成した展示台

10.今後の課題

今回の成果を基に、今後は展示台のさらなる発展性が期待される。今回製作した展示台は個展向けに最適化されたため、異なる展示空間や用途に対応できるようなモジュール化が今後の課題だ。また、今回は小学校で使われていた道南杉の天板に焦点を当てたが、今後は地域の他の廃棄物、例えば古民家の解体材などを対象としたアップサイクルを検討することで、活動の幅を広げることができる。これらの知見や技術を地域住民や若手クリエイターに継承するための仕組みづくり、そして、製作物のレンタルや販売による経済的な持続可能性の追求も重要な展望となる。

令和6年度 森町地域おこしインターン成果報告書

北海道大学大学院 工学院建築空間デザイン専攻都市
修士2年 伊藤貴洋

1. インターン期間

2025年8月1日（金） - 8月21日（木）

2. 滞在施設

Connect ∞ もり（北海道茅部郡森町字上台町330番地4）

3. 活動内容

私は、北海道大学大学院工学研究院の建築デザイン学研究室に所属し修士研究として北海道における地域材活用に関する研究を行っている。そこで、道南地域で積極的な木材活用への取り組みを実施している森町に着目し、地域おこしインターンに参加させていただきながら、木材活用への取り組みや背景、関係している方々へのヒアリング、見学を行った。

インターン期間の活動内容は大きく以下の3項目に分類できる。

- i - 「森町モデル」をはじめとして、スギ/カラマツ/トドマツを町内に有する森町での木材の建築への活用に向けた取り組みについての調査
- ii - 木育としての木材活用について知るため、一般社団法人学びの森や地域おこし協力隊の方々の木育WS活動への参加
- iii - その他時間外の自主活動として、町歩きや森町方との交流を通して町の魅力発見

4. 活動概要

上記 i - iii の活動について、その概要をまとめる。

※研究目的でのヒアリングも実施しているため、公開できる内容のみ記載

i - 「森町モデル」をはじめとして、スギ/カラマツ/トドマツを町内に有する森町での木材の建築への活用に向けた取り組みについて

- ・2025年8月1、2、7日 株式会社ハルキでの工場見学、ヒアリング
- ・2025年8月15日（午前、午後） 森町役場でのヒアリング
- ・2025年8月21日 森町モデル推進協議会の委員のみなさまへのヒアリング

木材の活用には「川上から川下」という言葉で表されるように、山（川上）で育った原木は、伐採後製材工場（川中）に運搬、製材され利用者/設計者（川下）という一連の流れがある。北海道は豊富な資源量を誇るが、間伐や手入れを行う造材業者や製材工場が減少しているといった課題を抱えている。

今回のインターン期間では、5日間、計6回のヒアリングを通して木材（地域材）活用という明確な手法や解決策がない課題に対する森町の取り組みを調査した。スギ/カラマツ/トドマツと北海道の主要針葉樹3種が生育する森町では、行政だけでなく、意匠/構造の設計者、製材工場や研究期間である道総研林産試験場のメンバーから構成される森町モデル推進協議会がつくられている。森町の公共建築建て替えに向けた技術開発と町内の人工林資源活用を目的に、平行弦トラスが開発されるなど活用にむけた取り組みがなされている。1日から実施してきたヒアリングや工場見学を通じて、株式会社ハルキの工場の運営や製材ライン、設計者が地域材使った設計をするうえでの課題など多くの知見を得ることができ、修士研究としてまとめていきたい。

また、ヒアリングを通じて最も印象に残っている質疑応答をここに紹介する。私自身、資源も製材工場も揃っている森町の現状はどこにでもあることではないと感じており、森町モデル推進協議会のような取り組

みを他の地域で展開する場合に求められることについて委員のみなさまにお聞きした。その結果、各方面の専門性の高い委員が集まることも勿論重要であるが、答えのない問題に対して、時に厳しい意見であっても同じ目標に向かって意見を言い合える関係性、チームワークも重要。という回答をいただいた。これまで技術的な課題やチェックポイントについてばかり考えてきたが、「人と人の関り方」という単に技術や資源背景、制度だけでなく、ソフト面での重要な気づきを得られた。



fig1. 株式会社ハルキにて

ii - 木育としての木材活用について知るため、一般社団法人学びの森や地域おこし協力隊の方々の木育WS活動への参加

大学院にて、木材活用をについて研究を進めるなかで建築利用に加えては材や副材として生産される木材の使い道にも興味を持っている。

※一般的に製材工場で発生したは材やチップはボイラーの燃料や製紙工場、動物の床材、薪材として利活用されているため、捨てられているという現状ではない。

これより、チップや製紙原料等の近い道に加えて、より付加価値のある用途についてインターン期間に経験した木育WS、副材活用の概要について、参加した以下4つのWS、活動についてまとめる。

- 2025年8月1日 市立函館高等学校 木育WS @株式会社ハルキ
- 2025年8月5日 あおぞらWS @イロモリ
- 2025年8月6日 静岡森町、北海道森町小中学生WS @イロモリ
- 2025年8月12、14日 什器作成

2025年8月1日 市立函館高等学校 木育WS @株式会社ハルキ

市立函館高等学校の1年生を対象に、北海道の森林資源の概要の説明から製材工場の見学、高校生のみなさんが事前に展開図を書いた図面の切り出し、組立を行った。

工場の見学では、右図のスギの原木価格の計算に関するクイズが印象的であり、実際の末口二乗法と呼ばれる計算方法をしながら、原木の体積を計算し価格を算出した。

この原木の体積は 1.20 m^3 であり、1立米あたりの価格が12000円であるため、14400円であることがわかった。長さが3710mmもある原木が15000円以下で売られていることに驚いた。このことから、製材や製品として価値を高めて利用することの必要性がわかる。



fig2. 原木の販売価格計算

製作作業では事前にかけてくれた図面に対して、修正を加える前に一緒に確認しながらそのまま「そのまま製作するとどうなるか」「どう変えたらいいか」という問を投げかけながらつくりあげていくWSのあり方が高校生向けということもあり勉強になった。レーザーカッターによる切り出しもあり、身近に触れられる木材と最新の技術を利用したWSであり、誰が参加しても学び、楽しめるものであると感じた。



fig3. 製作中の様子



fig4. レーザーカッターによる木材の切り出し

- ・2025年8月5日 あおぞらWS @イロモリ
- ・2025年8月6日 静岡森町、北海道森町小中学生WS @イロモリ

8月5、6日に行われたWSは対象年齢が中学生以下であったため、市立函館高等学校のWSとは内容が異なるものであり、木に触る / 木の音を聞く / においを嗅ぐといった五感を使いながら直感的に理解をしてもらうことを狙った内容であった。小中学生のみなさんだけでなく、引率の先生方も私の想像以上に引き込まれて参加してくれており、「木育は小さい子ども向け」という参加前に感じていた印象がガラリと変わった体験であった。

また静岡森町 / 北海道森町WSでは、のこぎりを使って枝を15cmびつりに切る競争や切った枝を使ってスプーン製作など、のこぎりや小刀を使う場面もあったが小中学生のみなさんは、「カッターで鉛筆を削ったことがある！」と、安全に気を使い過ぎることもできることを制限してしまうため、正しい安全な使い方をしっかりと共有したうえでチャレンジしてもらうことも重要であると、実際に参加して感じた。



fig5. あおぞらWS



fig6. 静岡森町 / 北海道森町WS

・2025年8月12、14日 什器作成。

8月後半に控えるイベントに向けて什器を作成した。もともと、木材を積載するときに使用する栈木を再利用し作成された。地域で使われた木材を再利用し再び町で使用するその使われ方と、供給できる環境にあることが重要であると感じた。そこには、地域おこし協力隊の方々の活動があり町の地域資源活用的一端を担っていた。

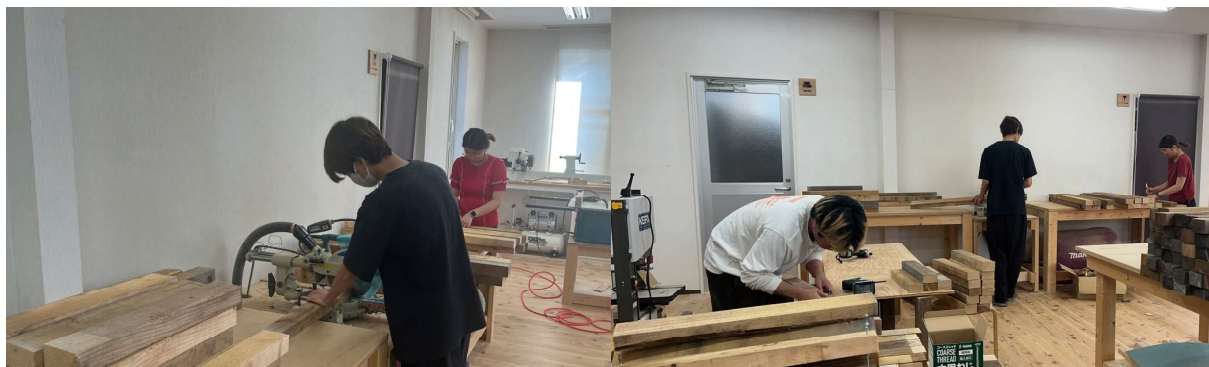


fig6. 静岡森町 / 北海道森町 WS

iii - その他時間外の自主活動として、町歩きや森町方との交流を通して町の魅力発見

その他、自主的な活動を通して気づいた森町の魅力について紹介をする。

1. 富士見町神社（前夜祭、本祭）

休日に偶然出会った富士見町神社まつりでは、主催しているみなさまが地域おこしインターン生である私をすぐに受け入れてくれて、運営に参加させていただくことができた。お話を聞くと、お祭りに参加してくれる人も年々減少傾向であることがわかった。地元ならではの温かい雰囲気のお祭りであり、外のコミュニティからは参加しづらい / あるいは外の方は参加してほしくないだろう、といった考えを持っていたがその印象は大きく変化した。（翌日には、獅子舞を左腕に宿し町内のみなさんの頭を噛んで回った。）

地域の資源は、木材や漁業だけでなくその場所に根ざした文化があることも忘れずにいきたいと感じた出来事であった。



fig7. 富士見町神社

2. ヤマウミベース

地域おこし協力隊の方の取り組みによって、閉じてしまうシャッターを開け地域の人の開いた居場所を作るということを目指して作られたベースである。



fig8. 昼と夜のベース

週末の金曜日、土曜日の夜にはシャッターが空き、明かりが灯る。中に誰がいるか一目でわかり、気軽に入ることのできる交流の場があることは、私のような町になじみのない人でも温かく受け入れてくれる場所であった。

まとめ

森町の地域おこしインターンを経て得ることができた知見を踏まえて、北海道の地域材利用に関し修士論文を書き上げて行く。研究側面以外でも、木育や地域おこし協力隊のみなさんの活動や経験をお聞きすることで、地域が抱える実務的な問題についても知ることができた。今回の一連の経験を活かして今後の人生で、様々なことにチャレンジしていきたい。

令和7年度 森町地域おこしインターン成果報告書

北海道大学3年
工学部環境社会工学科環境工学コース
末永輝夜
同・農学部生物環境工学科
久保田智博

1. インターン概要

以下の期間において、地域おこしインターンを実施した。
2025年8月15日（金）～2025年8月29日（金）

活動内容として、以下を実施した。

10L洋酒樽の試作

2. 活動背景

森町には有名な道南スギだけでなく、ミズナラ等の広葉樹資源も豊富に存在している。このうち道南スギは町と民間が一丸となって様々な場面で有効活用が進んでいることが分かった。一方、広葉樹に目を移すと、2年程前から本州からのナラ枯れ病が伝播している。まだナラ枯れ病が伝播していない森町ではナラ枯れ病への対策と、広葉樹材の有効活用を進める機運が高まっていた。

そして昨年広葉樹を活用して洋酒樽をつくるミチタル株式会社と「地材地消」を実践する製材会社ハルキ、森町の三者で連携協定を結んだ。連結協定では洋酒樽の試作、製品化を通して広葉樹材の高付加価値化、地場産業の振興、雇用の創出を目標として掲げている。我々は森町の地域おこしインターンとして協力隊の方々と協力しながら樽作りに励み、森町での樽作り事業の前進を担った。

3. 活動内容

私たちは森町の若年層担い手育成施設であるiroMori（イロモリ）を利用し、広葉樹のミズナラ材を用いて10Lの洋酒樽を試作した。樽の製作の手順は以下の通りである。

1：樽板の製材 → 2：締め → 3：蒸し → 4：曲げ → 5：鏡板の溝彫り
→ 6：焼き → 7：鏡板挿入 → 8：水漏れ試験

今回は4の曲げまで、即ち筒の状態まで出来上がった。以降、1～4のプロセスについて、実際に製作したことをもとに説明する。

1：樽板の製材

今回は事前に古平から森町へ運んだ木材を利用した。製材には3つのステップがある。

- ①丸鋸（丸い刃のついた電動工具）で長さをカット
- ②プレーナー（木材表面の凹凸をなくしたり薄くしたりできる）で厚さを均一にする
- ③治具を用いてルーターテーブル（ルーターを上向きに固定した台のこと）で板から樽板の形に削る

樽板の製材において特に重要なステップが③である。樽の形状がただの円柱ではなく、中心が膨らむよう曲率を生み出すために、樽板の形に削ることが必要である。



図 1 樽板の写真。両端が中央に比べて細くなっている。

私達は、普段3Dプリンターを用いて治具を作り、ルーター台で板を削っている。しかし、イロモリにはCNCルーターがあるため、地域おこし協力隊の小川フランソワ航輝さん（以下、小川さん）に依頼してCNCルーターを用いて治具を作ってもらった。CNCルーターは、大きな木材から木を削り出すことで目的の立体を作り出す。3Dプリンターよりも早く正確に治具を出力することができ、非常に心強い存在だった。治具は、設計図との誤差がどこも0.5mm以内に収まり、かなり良い精度だった。



図 2 CNCルーターで治具を出力する様子



図 3 実際に使用した治具 50cmほどの長さがある。



図 4 治具を用いてルーターテーブルで削っている様子

2：締め

1で製材した樽板を並べ、一端をラッシングベルト（車などで荷物を固定する時に使うベルト）を用いて締め、タガ（樽を締める輪）を2本入れ、タコ足の形にする。



図 5 締めの様子



図 6 「タコ足」のイメージ

3：蒸し

木に弾性を持たせて曲げやすくするため、2のたこ足状態の筒を炭火を使って蒸す。蒸しながら、筒全体に水で濡らした雑巾などで水分を含ませることが重要である。水分を木に含ませることで、木材の内部にも熱を効率よく伝えることができる。筒全体が熱くなると、リグニンという木の構成成分が軟化して柔らかくなり、のちに曲げる際に割れにくくなる。

5分間蒸し、雑巾で濡らす工程を何度も繰り返す、計40分～60分程度行う。また、本工程ではコンポストで覆って熱を伝わりやすくする。



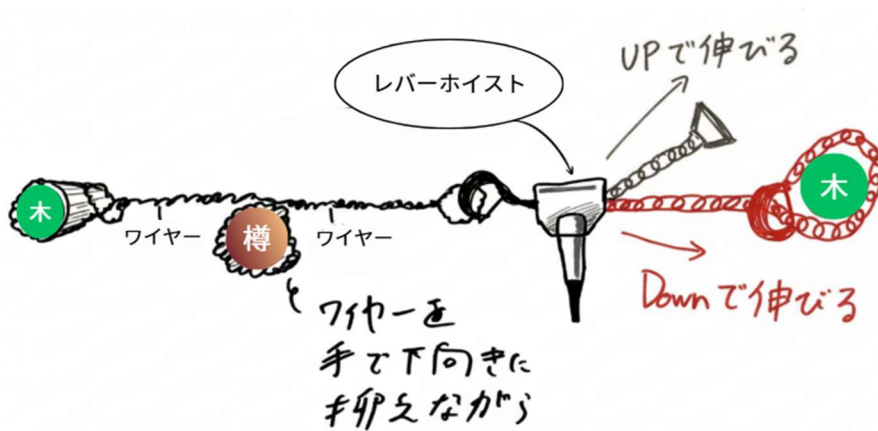
図 7 蒸しの工程の様子

4：曲げ

ワイヤーロープとレバーホイストを用いてたこ足に開いた口を縛り、締める。この際に、強い力がかかるのでワイヤーロープとレバーホイストのチェーンは木など頑丈なものに巻きつけておく。



図 8 レバーホイスト（チェーンを少しずつ播くことができる）



樽上部(タガ2分下方)にワイヤー巻く

図 9 曲げの様子をホワイトボードに書いていた時の図

以上の1～4の工程を持って筒の状態が完成し、今回は3つの筒が完成した。作った回数を重ねるごとに筒としてきれいな形になった。

右の筒は写真でも上部に隙間があり、タガが一本しか入っていない。上から見ると歪みも激しい。

中央の筒は設計に対して小さすぎる筒ができたため、中央に入るはずだった2本のタガが固定できなかった。

左の樽は作業最終日のもの。本インターンの知の結晶ともいえる。全体の形状やタガの位置が最も設計に近い。



図 10 3つの完成した筒（下の写真の左から最新版となっている）

4.得られた知見・マインドセット

我々は2週間樽を作るための機械・道具を自作することから始め、筒状の形にするに至った。その過程では木工機械の使い方に始まり、仮説検証のサイクルを回すこと、作業の効率化など実際に手を動かして時間をかけたからこそ得られる知見や気づきがあった。この章では特に印象に残っている知見を報告書に詳述したい。

- 設計図に忠実に樽板を作ることの重要性

最初に作った樽は樽板が設計図の寸法と誤差が生じていたことに気づかず、樽板を並べる際にも底面に円が取れず、結果として締めた際にきれいに円柱状にならず、内側から形が崩れてしまった。

次回以降、設計図を見直して樽の長さに関して修正したところ、樽板を並べる際にもスムーズに円柱状になった。設計図との誤差を確認しながら工程を進めることの重要性を学んだ。

- 「ないものは作る」精神

この精神は地域おこし協力隊の小川さんから学んだ。

例えば私たちがイロモリに着いた時、普段使っているルーターテーブル（樽板を成形するための台）はなかった。そこで、初日は小川さん主導の下、新品のルーターと倉庫にあった適当な木材からルーターテーブルを作った。さらに数日後、そのルーターテーブルを使っていると、集塵機がいために、削った木の粉が周囲に舞ってしまう状況が無視できなくなっていた。そこで、私たちは余った材からルーターテーブルに集塵機の先端を取り外しできる機構を作り、集塵を可能にした。札幌近郊の本拠地ではルーターテ

ーブルから舞い散っていく木の粉を壁に集めているだけだったので、この機構は在札チームから大いに感心された。

私たちはこの成功体験を糧にその後も木へらや名前印、樽製作に必要な道具などを、協力隊の方々の協力を得ながら自前で作るようになった。

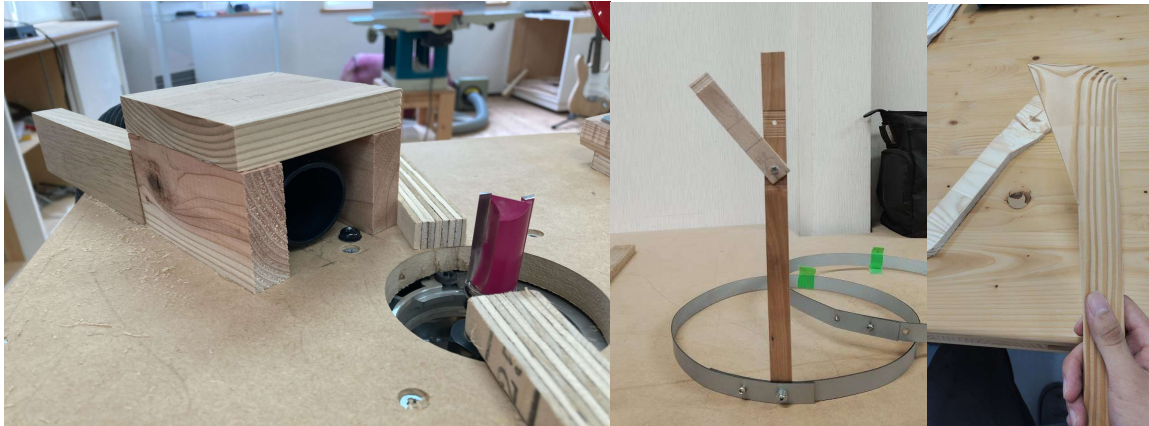


図11、12、13 左から順に集塵機取付具、樽板並べループ、木へら

5.おわりに

2週間の森町地域おこしインターンシップでは、樽作りの一連の作業に没頭し、充実した毎日過ごすことができた。

このような充実した楽しい2週間の機会を設けてくださった森町役場の皆様には非常に感謝している。そして、小川フランソワ航輝さんをはじめとする協力隊の皆様には、木工の技術だけでなく、2週間で僕らが見きれなかった森町の魅力を教えていただいた。毎日iroMoriへ送迎してくれた協力隊の方々には有形無形に関わらず、いつも何かを作っている方々だった。その姿勢からもモノづくりの楽しさを教わった。



図14 鈴木知事との記念撮影。iroMoriにて。

また、私たちは活動の殆どをiroMoriで過ごしていたが、樽作りを応援してくれた森町へ訪問中の大学生や、温かい言葉をかけてくださった鈴木直道知事の存在も、大きな励みになっていた。

今回は樽を筒の状態まで作ることができたが、まだ道半ばといったところだ。このインターンで得た知識と経験、そして試行錯誤を繰り返した時間は、私たちにとって大きな財産となっている。今回得られた知見の多くはダイレクトで樽作りに活かされると同時に、今後何かを企画したり作ったりする時にも役に立つと確信している。インターンを経て成長した自分たちの手で樽を最後まで完成させたい。私たちは森町の豊かな広葉樹が洋酒樽として新たな価値を生み出し、地域の未来につながっていくこのプロジェクトに、今後も関わっていくつもりだ。

令和7年度 森町地域おこしインターン成果報告書

札幌市立大学デザイン学部人間情報デザインコース3年
早坂健太郎

1. インターン概要

以下の期間において、地域おこしインターンを実施した。
2025年9月1日（月）～2025年9月16日（月）

活動内容として、以下の内容を実施した。

- ・イカメシ土偶をモチーフにした燻製器の制作
- ・ヤマウミベースでの燻製披露会

このインターンは、森町の林業や木材加工業の現状を学びながら、地域資源の新たな活用方法を考えることを目的として実施した。もともと、木材と食を組み合わせた「燻製」という方向性を考えていたが、それだけでは既存の一般的な燻製との差別化が難しいと感じていた。現地でのフィールドワークや関係者との対話を通して、森町には鷺ノ木遺跡やイカめしといった独自の歴史的・文化的背景があることを知り、それを取り入れることで新しい表現ができるのではないかと考えるようになった。

その発想から、鷺ノ木遺跡で出土し、近年人気が高まっている「イカメシ土偶」をモチーフにした燻製器の試作を行った。燻製の仕組みを学びつつ、実際にウッドチップを製作して、それを用いて食材を燻すことで、森町の木の香りや素材の魅力を体感的に確かめることができた。

これらの活動を通して、森町の木材や食材が持つ価値を再認識するとともに、地域の文化をものづくりに結びつける視点の重要性を学んだ。



左から2つ目がイカメシ土偶。儀礼に使われていたと考えられている。

2. 活動背景

将来は、故郷である北見の活性化につながる仕事に携わりたいと考えているが、そのためにどのようなスキルや視点が必要なのか、また自分の能力をどのように磨いていくべきかが明確になっていなかった。地域経営の現場に実際に関わることで、その手がかりを得られるのではないかと考え、今回のインターンに参加した。

活動の舞台となった森町は、豊かな森林資源と海の幸に恵まれ、林業と食文化の両方が根付く地域である。こうした多様な地域資源がどのように活かされ、地域づくりにつながっているのかを学ぶことは、今後の自分の進路にも通じると感じた。

受け入れ先からは、森町の木材や林業を起点に自由な発想で取り組んでみてほしいとの提案をいただき、地域資源を生かしたものづくりの可能性を探ることをテーマとして活動を始めた。

3.成果の内容

■イカメシ土偶をモチーフにした燻製器の制作

活動の初期段階から、森町の木材をどのように食と結びつけられるかをテーマとして考えていた。

その中で「燻製」という手法に着目し、森町の食材を森町の木で作ったウッドチップを用いて燻製をし、樹種ごとの味の違いを比較することを考えた。ただ燻製をするだけではなく、燻製器にも森町らしさを取り入れたいと思案する中で、鷲ノ木遺跡で出土した「イカメシ土偶」の存在を知った。この土偶は、町の歴史的文化財として貴重でありながら、現地では観光やまちづくりの中であまり積極的に発信されていない印象を受けた。そこで、森町の歴史と食文化を同時に象徴できる存在として、このイカメシ土偶を燻製器のモチーフに採用することにした。

燻製器の制作はインターン期間中に二回行った。二回とも制作にかけられる時間が限られていたため、材料にはオープン粘土を用い、サイズは体験用としてフライパンに収まる程度とした（直径85mm、高さ300mm）。本体は上下分割構造とし、上部は燻製室、下部は加熱室とした。加熱室の上部には金網を設置し、そこに置いた食材は燻製室に収まることとなる。全体の煙の流れを確保するために上部と下部それぞれの側面に通気孔を設けた。側面の厚みは、短時間で乾燥・焼成ができて、かつすぐには割れないことを意識し16mmとした。燻製器の製作には学芸員の片山さんにご協力いただいた。

一回目の制作は後述するヤマウミベースでの燻製披露会に向けて行い、二回目の制作は（またもや）後述するコネクト森での燻製パーティに向けて行った。

なお今回制作した燻製器は体験用のため、燻製をする際は、コンロにフライパンを置いてその中でチップを熱し、そのチップを囲うように燻製器を被せる。つまり単独で燻製ができるわけではない。

制作を通じて、森町の文化的な象徴であるイカメシ土偶を現代的な食体験と結びつけることで、地域の魅力を新しい形で表現できることを実感した。また、オープン粘土で試作することで、今後の木製バージョンや石バージョンの燻製器の展開を具体的に検討する土台となった。



制作したイカメシ土偶。歪な形になってしまった。

■ヤマウミベースでの燻製披露会

制作した燻製器の試作検証として、地域住民の交流の場となっている「ヤマウミベース」にて燻製の披露会を行った。燻製等の調理スペースとして、テーブル一台とキッチンをお借りした。燻製の食材には、ラルズマートの向かいにある佐々木精肉店のソーセージや、スズキのタ

マゴの卵、噴火湾産のタコ、いなみ食品のイカ天といった森町の食材のほか、樹種による味や香りの違いを検証するためにチーズやベーコンも用意した。食材の選定には地域おこし協力隊の方々に助言を頂いた。

使用するウッドチップはイロモリで制作した。森町で主に採れる、道南杉・トドマツ・カラマツ・ミズナラそれぞれの端材の板を3cm幅程度にスライスし、それを手で割ったり、袋に入れて金槌で叩くなどして、細かいウッドチップに仕立てた。

燻製器が完成したのが当日だった（オーブン粘土は焼いてからも十分に乾燥させる必要がある）ため、ぶっつけ本番で燻製をすることとなった。はじめはIHで燻製を始めたが、火力が足りず時間が予想以上にかかることが分かり、急遽ヤマウミベースのカセットコンロと鍋をお借りして、二台体制で燻製を行った。カセットコンロと鍋で調理する燻製は、一回の燻製に約20分を要したのに対し、IHと燻製器で調理する燻製は、一回におよそ1時間を要した。

披露会の計画は5日目の夜から始めた。計画段階では、燻製器の制作にご協力を頂いた片山さんや、ヤマウミベースの小川さん・歌住さん、活動中の送迎やアイデアへの助言などでお世話になった春澤さんや荒井さんなどに燻製を食べていただくことを目標とし、滞在時間が短かった荒井さん以外には食べていただけた。また樹種による味や香りの違いを比較することも目標としたが、想定以上にヤマウミベースの来客数が多く、一人当たりの燻製を食べられる数が限られてしまったため、達成できなかった。

計画ではそれほど意識していなかったが燻製への人々の反応が印象的であった。披露会を知らずに来た方々から、燻製の香りや煙を感じて「これは何をしているのか」と質問されることが非常に多かった。食べたいと言ってくださった方も非常に多く、予想以上にたくさんの方々に燻製を食べていただけた。細かな味・香りの違いを聞くためのシート等の用意ができず、感想を聞く余裕も持てなかったのが反省点ではあるが、町に関わる多くの方に味わっていただけただけに意義があると感じている。



ウッドチップの制作過程。3cm幅にスライス。



金槌で割る。



披露会の燻製。

■コネクト森での燻製パーティ

ヤマウミベースでの披露会の反省を踏まえて、樹種による味・香りの違いをより詳細に比較するために、改めて燻製を作って味わう機会をコネクト森で設けた。祝日に行ったため、厳密にはインターンの活動に含まれないが、活動に密接に関係するため、記述する。また、披露会で使用した燻製器は制作の過程で歪な形になっていたため、よりイカメシ土偶っぽい、美しい造形を目指して、3連休を使って改めて制作した。

燻製器の制作にご協力を頂いた片山さんと、活動への助言をしてくださった松浦さんをお招きし、コネクト森で食卓を囲んだ。披露会では人が集まる前に一つも燻製ができておらずスタートダッシュが遅れた反省を踏まえて、片山さんらがいらっしゃる2時間前から仕込みを始め、いらっしゃった時には何かしらを食べられる状況をつくった。ここで記述するタコの燻製はすべて制作した燻製器を用いて調理した。

用意した食材は披露会とほぼ同じであったが、ここではしっかり味・香りを比較できたタコについて記述する。タコは燻製にした時の色の乗りが良く、素材の香りが木の香りを邪魔することもない。なにより、燻製としての味が最も好評であった。

用意したウッドチップの種類も披露会と同じである。ただ、市販のウッドチップと比べて煙が少し出にくかったため、より細かく砕いて煙が出やすくした。

まずは道南杉で25分ほど燻した。燻製中はわかりやすく木の香りが漂い、その中にほのかな甘みも感じた。燻製後10分ほど冷ましてから食べた。噛むと中から木の香りが広がり、みりんを足したような甘みが舌の上で溶けた。松浦さんによると杉の香りがしっかり感じられたそう。

次にカラマツで20分ほど燻した。燻し始めは杉と似たような香りであったが、途中から香りに香ばしさが増した。最も煙が出やすかったのはカラマツである。食べてみると渋みがあり、クセのある味わいであった。好みが分かれたが、片山さんはカラマツもおいしいと言って食べていた。

その次にトドマツで30分燻した。煙の香りは杉とほぼ同じであった。口に入れると木の香りが優しく広がり、タコの旨みもしっかり感じられた。クセの強さで言えば杉とカラマツの中間といった具合で、タコにちょうどよく香りが乗り、最も食べやすかった。片山さんはトドマツが一番好きとおっしゃっていた。



作り直した燻製器。より美しく仕上げた。



タコの燻製。見た目に樹種による違いは見られなかった。

最後にミズナラで30分ほど燻した。煙の香りが独特で、ほろ苦いような、自然の香りが漂った。煙が最も出にくかったのはミズナラであった（燻す順番も関係しているのかもしれないが）。燻煙の香りと違って、食べてみるとあっさりした味わいであった。木の香りがほんのり感じられたが、ミズナラの香り？はよくわからなかった。

この燻製パーティでは、同じ条件で燻した食材でも、使うチップの種類によって香りの立ち方や味の感じ方に微妙な差があることを確認できた。一方で、見た目の色味にはほとんど違いがなく、味や香りの違いも食べ比べをして初めてわかる程度であった。このことから、燻製体験の魅力は樹種による味わいの違いを感じることもより、森町という土地そのものを味わう体験そのものであることを再認識した。

4.学び

木と食を掛け合わせるアイデアは森町に行く前から浮かんでいたが、それをより魅力的に見せるアイデアは現地でのフィールドワークによって生まれた。2日目の自由行動で、たまたま遺跡発掘調査事務所に辿り着き、見学したことで、イカメシ土偶という歴史的な要素を取り入れるアイデアが浮かんだ。一見すると交わらないように感じる要素を組み合わせられたのは、直接目で見てインスピレーションを受けたからに他ならない。アメリカの実業家、ジェームズ・ウェブ・ヤングは著書『アイデアのつくり方』で「アイデアとは既存の要素の新しい組み合わせ以外の何ものでもない」と語っていたが、まさしくそれを実感したのが今回のインターンの学びであった。

5.今後の展望・まとめ

当初は、樹種による味や香りの違いを比較することが目標であった。しかし実際に森町の木材と食材を使って燻製を行う中で、味わいの差よりも、「町の木で町の食材を燻す」という行為にこそ意味があると感じるようになった。今回の燻製は単なる調理体験ではなく、地域資源を自分たちの暮らしと結びつける新しいアプローチであると考えている。このインターンのテーマは森町のまちおこしであったが、まちおこしで最も力を持つのはまちに関わる人々である。燻製体験が、森町の人々が森町の魅力を改めて認識する機会になる可能性を感じた。今後は「地域の魅力を考える燻製ワークショップ」を開催するのもおもしろいのではないだろうか。

おわりに、今回の活動を支えてくださった多くの方々に感謝を述べたい。地域おこし協力隊の方々には、移動やアイデアの相談、関連する情報を得られそうな人や場所を紹介していただいたりするなど、現地での活動を支えてもらった。土偶に関する調査や燻製器の制作にあたっては、学芸員の片山さんから歴史的背景の解説や具体的なアドバイスをいただいた。この場を借りて深く感謝申し上げる。

札幌市立大学デザイン学部
人間空間デザインコース3年
宮澤 なな

1. インターン概要

以下の期間において、地域おこしインターンを実施した。

2025年9月1日(月)～2025年9月22日(月)

活動内容として、以下を実施した。

- (1) 道南スギを素材とした小皿の制作および、その小皿を使用した食事会の開催
- (2) 駒ヶ岳産木炭を原料とする絵の具の制作

2. 活動背景

私は札幌市立大学デザイン学部にて在籍し、コミュニティデザインを専攻している。人と人、人とモノが出会うとき、どのようなきっかけがあればその体験がより豊かなものとなるかを探求している。また、日頃から木材を使った作品制作を行っており、木材の性質や加工方法を、実際に材に触れながら学ぶことに強い関心を持っている。

そのような中、本学の古俣先生より森町地域おこしインターンのプログラムを紹介していただいたことがきっかけで森町を知った。地域おこし協力隊という地域復興の担い手の現場を間近で見られる機会であり、林業が盛んな森町に滞在することで、木材と地域との関わりを学びたいと考えた。これらの理由から、本インターンプログラムへの参加を決意した。

3. 活動内容

- (1) 道南スギを素材とした小皿の制作および、その小皿を使用した食事会の開催

森町の地域資源である道南スギは現在、利用期を迎えているものの、建築材料以外での活用が進んでいない。また、多くが道外へ出荷されるため、地材地消が十分に行われていない状況にある。その現状を本インターンのオリエンテーションや、見学で訪れたハルキにて伺い、自身でも道南スギを加工し、新たな活用方法を提案したいと考えた。

さらに、森町滞在中には林業だけでなく、農業・漁業・食文化にも触れる機会を得た。森町の旬や特産、そして町の資源の豊かさを「味覚」を通して体感することができた。以上の理由から、道南スギを素材とした小皿の制作と、その小皿を使用した食事会の開催を行った。

(1) 道南スギを素材とした小皿の制作および、その小皿を使用した食事会の開催

a. 木工旋盤での加工

9月11日～16日の期間にIromoriで木工旋盤を用いた皿の加工を行った。制作にあたっては、農林課地域おこし協力隊の松浦さんにご指導をいただいた。使用した木材は森町産の道南スギ集成材で、直径14cmの皿を計6枚制作した。集成材は、小口面を皿の表面に持つてくるようブロック状に接着し、旋盤にかけてながら手作業で1枚ずつ削り出した。接着の際には木材の年輪のカーブが交互になるようにし、材の反りを抑える工夫を施した。ブロック断面からはくっきりとした年輪が現れ、皿の模様として興味深い表現が生まれた。

旋盤での加工は苦戦した。刃物を当てると木材が毛羽立ち、途中で刃が持っていかれるなど、加工の難しさと道南スギとの相性の悪さを感じた。

この経験から、道南スギでの旋盤加工には手間と労力、そして怪我のリスクが伴うことが分かった。最初は1枚あたり約3時間を要したが、慣れると1時間半程度でヤスリがけまで行えるようになった。しかし、表面にはざらつきが残った。

最終仕上げには、蜜蝋とアマニ油を混ぜた手製の蜜蝋ワックスを塗布した。蜜蝋ワックスはConnect[∞]森で制作し、完成した皿に塗った。塗装によりある程度の塗膜と手触りの改善、年輪模様の強調はできたが、水洗いなどの使用で毛羽立ちが再び現れた。



写真1：道南スギ小口断面



写真2：旋盤にかけている様子



写真3：毛羽立つ表面



写真4：完成した皿

(1) 道南スギを素材とした小皿の制作および、その小皿を使用した食事会の開催

b. 食事会の開催

9月18日の昼食時にヤマウミベースにて、制作した皿の披露とインターン最終報告を兼ねた食事会を開催した。報告会は食事形式とし、森町の食材や地元商店を自ら回って見つけた食材を使った6品の料理を囲みながら、インターンでの学びや制作の気づきを語り合う場とした。

同時期に森町に滞在していた武蔵野美術大学の学生6名を招待し、学生同士の目線から森町の資源や活用方法について意見交換を行った。制作した皿6枚に合わせ、一品ずつ料理を考案した。森町で出会った魚や商店、協力隊の春澤さんにもらったかぼちゃなど、滞在中の経験を料理に反映した。

食事会では、皿の手触りや木の香りを感じてもらうことができ、参加した学生からは「普段使う食器との手触りや軽さの違いから道南スギの特徴を感じ取れた」という感想を得た。また、料理からも森町の食の豊かさを実感できた。

今回の制作と食事会は、森町での体験を通して得た産業や資源の豊かさを伝える場となった。道南スギ特有の年輪模様の意匠的可能性を見出せた一方で、加工時のリスクや時間的コストなどの課題も明らかとなった。



写真5：制作した皿と料理



写真6：森町のかぼちゃで作ったサラダ



写真7：食事が揃った様子



写真8：武蔵美生との交流の様子

(2) 駒ヶ岳産木炭を原料とする絵の具の制作

本インターンのオリエンテーション時に駒ヶ岳木炭の存在を知った。かつて盛んだった木炭産業も現在では衰退しており、活用方法の検討も進んでいない。その現状を確かめるため、長岡林産を見学した。ちょうど窯出しの作業が行われており、一基の窯から約300kgの粉炭が発生していることを知った。この粉炭は活用されず廃棄されているとのことだった。実際に長岡林産のご主人からも「炭粉の活用に悩んでいる」との話を伺った。

以上の背景から、駒ヶ岳木炭の粉炭を活用し、皿の塗装などに用いる絵の具を制作できないかと考え、実験を行った。

a. 絵の具の制作

今回は水彩絵の具とアクリル絵の具の2種類を試作した。以下に概要を示す。

① 水彩絵の具:粉炭をすり鉢で粉碎し、アラビアゴムメディウムを混合。

② アクリル絵の具:粉炭をすり鉢で粉碎し、アクリルメディウムと水性顔料分散剤を混合。

いずれも粉碎しきれなかった炭粒のざらつきが残るが、その質感が炭特有の風合いを生み出した。紙や木材に着色したところ、黒色の発色がよく、一般的な絵の具と大きな差は感じられなかった。特にアクリル絵の具は木材の小口模様を残しながらも色がしっかりとおり、耐水性も確認できた。これは屋外塗装への応用可能性も感じさせた。

当初は道南スギの皿への塗装を予定していたが、食器という性質上、ざらつきのある絵の具塗装は不適切と判断し、使用を断念した。



写真9：廃棄される粉炭



写真10：すり鉢で細かくした粉炭



写真11：粉炭で制作したアクリル絵の具



写真12：紙へ着色した木炭絵の具

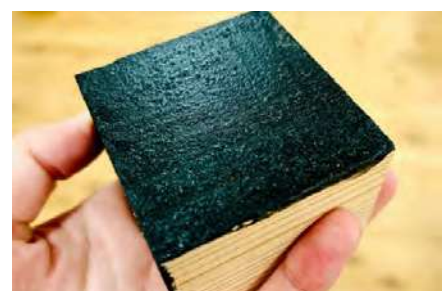


写真13：木材へ着色した木炭絵の具

4. まとめ

今回、森町の資源である道南スギと駒ヶ岳木炭の利活用方法を実作を通して検討することができた。特に印象的だったのは道南スギの年輪模様であり、針葉樹特有の明瞭な年輪は人工的には描けない有機的な曲線美を持っていた。今後は皿に限らず、他の小物や工芸品への展開も検討したい。

また、森町の食体験や豊かな資源、そして滞在中の記憶を料理として共有することで、言葉以外のかたちで他者とつながることができたと感じた。これらは林業体験だけでなく、農業や漁業、人々の関わりを通して得た森町の知恵があってこそその成果である。

さらに、資源が豊富にあっても、それを維持・循環させるためには人の存在と発想が不可欠であることを痛感した。長岡林産のご主人の「自分たちだけではそこまで手が回らない」という言葉からも、その現状が伺えた。

また、地域おこし協力隊による支援や指導、そしてIromoriなど学生が活動できる環境が整っていることの素晴らしさを実感した。協力隊の方々が学生の関心や表現方法を共に考え、支えてくださる姿に深く感銘を受けた。町と人をつなぐ媒介として、地域おこし協力隊の存在の重要性を改めて認識した。

5. おわりに

本インターンでの活動および成果報告を、2025年9月8日（水）に札幌市立大学で発表した。この発表は大学のインターンシップ授業の一環として行い、受講生および担当教員に向けて発表した。

当日は制作した小皿と木炭絵の具のほか、活動報告ポスターと小冊子を用意した。発表後、教員や学生からは、皿の年輪の美しさや、学生として地域に滞在し資源を活用する視点について多様な意見を得ることができた。

今後は、森町の資源活用の探求を続けるとともに、森町と学生がどのように関わることで相互により豊かな発展を遂げられるかを研究していきたいと強く考えている。



写真 14：学内報告会の様子



写真 15：制作したポスターと冊子

令和7年 森町地域おこし協力隊インターン成果報告書

神戸大学
海洋政策科学部海技ライセンスコース航海学領域2年生
松岡朔路

1. インターン概要

以下の期間において、地域おこし協力隊インターンを実施した。

2026年1月22日(木)～2026年2月4日(水)

活動内容として、以下を実施した。

SNS (Instagram: @little_hokkaido_mori)を利用した、森町に関する情報発信。

2. 活動背景

私は「水曜どうでしょう」が好きで、番組を通して目にする北海道の風景や地域の雰囲気、そして北海道の人々が持つ魅力に触れる中で、北海道への関心を強く抱くようになった。そこから、北海道に住みたい、北海道で働きたい、北海道のために何か貢献したいと考えるようになった。そうした思いの中で、地域おこし協力隊インターンの募集欄 (<https://www.iju-join.jp/cgi-bin/recruit.php/9/list>) から森町の募集を発見し、応募に至った。森町のインターンでは、ホテル生活ではなく自炊ができる住宅を貸し出していただけられる点も、北海道暮らしの体験につながると感じ、魅力を感じた。

活動にあたっては、これまでに経験してきたSNS運用系企業での長期インターンや、他地域の協力隊インターンでの経験を活かし、SNSを活用した情報発信に重点を置くこととした。森町を訪れるにあたり、事前にインターネット等を通じて情報収集を行ったが、観光情報を含め、十分な情報を得ることができず、森町に対しては「未知の町」という印象を抱いた。

そこで、誰でも「森町とはどのような町なのか」を理解できるような媒体を目指して、活動を開始した。

3. 活動内容

本インターンでは、Instagramアカウント「りとる北海道もり 協力隊インターン/@little_hokkaido_mori」を運用し、情報発信を行った。“りとる北海道”とは、森町の地域おこし協力隊員の人から伺った言葉である。海、山、温泉、そして海産物と北海道の魅力がぎゅっと凝縮された森町の特徴をよく表した表現であり、森町にぴったりなキャッチコピーであると感じた。そこで、この表現をSNSアカウント名に利用した。SNS発信となると、町外の人に向けた観光情報的な要素が強くなることが多い。しか

し、今回の活動では、町外の人々に森町を知ってもらうことだけでなく、町内に住む人々にも改めて森町の魅力を感じてもらい、地域への愛着を深めてもらうことも意識して情報発信を行った。そのため、投稿内容としては観光客向けの有名な観光地だけでなく、森町が誇る産業や、町民でもあまり訪れる機会のない場所、地域の人々にとっての拠り所となっている場所などにも着目した。こうした場所を紹介することで、森町の多様な魅力を伝えるとともに、地域に暮らす人々が改めて自分たちの町の良さを見つめ直すきっかけになることを目指した。投稿にあたっては、一件一件実際に訪問して、じっくりとお話を伺うことで、町の人たちとの関係性を構築していくことも目標とした。

【アカウントの情報】

- ・アイコン（協力隊員の方と iroMori で作成）



- ・名前：りとる北海道もり 協力隊インターン
- ・ユーザーネーム：little_hokkaido_mori
- ・フォロワー数：270人 フォロワー数：341人(2026年3月16日現在)
- ・総閲覧数：31,164

【投稿について】

- ・写真投稿：17件 動画投稿：2件
- ・編集等を鑑みて、投稿までにかかる時間が比較的短い、写真投稿を中心にした。
- ・ショート動画は編集作業等に時間がかかるが、伝えられる情報量が圧倒的に多く、トレンドでもあるので、数は抑えつつも作成した。
- ・投稿の際に、二つ以上のアカウントが一緒に投稿することができる仕組み“共同投稿”を利用することで、閲覧数の増加を図った。
- ・名前に協力隊インターンと入れることで、他地域の協力隊員のフォロワー増加を図った。

- ・見栄えが良く、認識しやすいように、同じフォーマットで統一した、

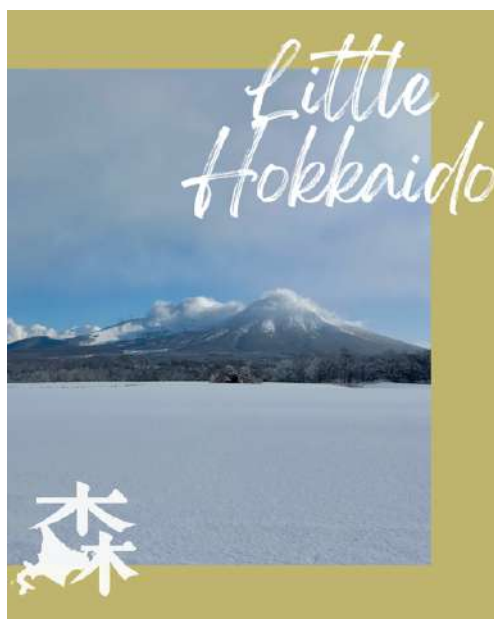


【投稿内容】

以下、簡易的な投稿内容を記載する。

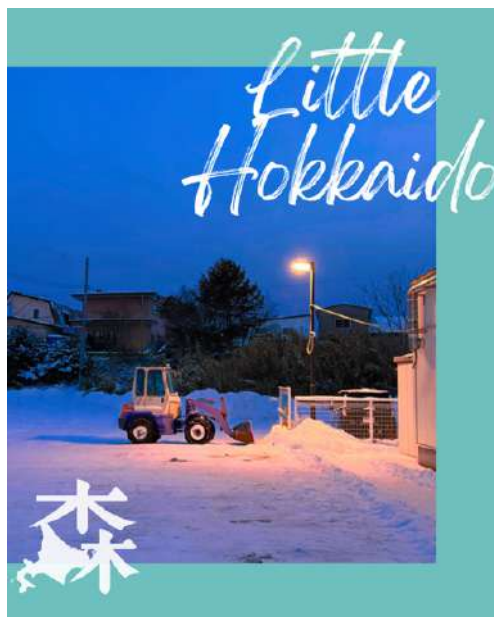
- (1) 駒ヶ岳(閲覧数:779 いいね数:51)

投稿の意図：森町のシンボル、観光要素の紹介。町外の人向け



(2) 小さな除雪車(閲覧数:1138 いいね数:55)

投稿の意図：森町の暮らしを紹介。町外の人向け



(3) 林業(閲覧数:865 いいね数:45)

投稿の意図：森町の産業を紹介。町内外の人向け。町の人でもなかなか見ることのできないところを発信して、林業についてさらに知ってもらおう。



- (4) ワニ商店さん(共同投稿※ 閲覧数:2932 いいね数:106)

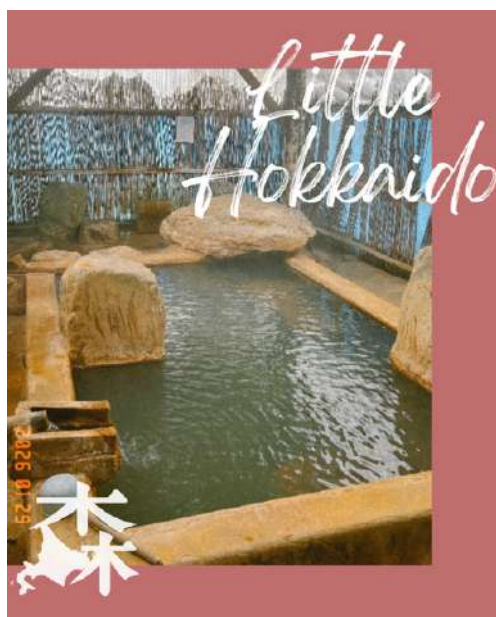
投稿の意図：町内の取り組みを紹介。町内外の人向け。子育て環境についてアピール。



- (5) 元湯神泉館 にこりの湯さん(閲覧数: 802 いいね数:52)

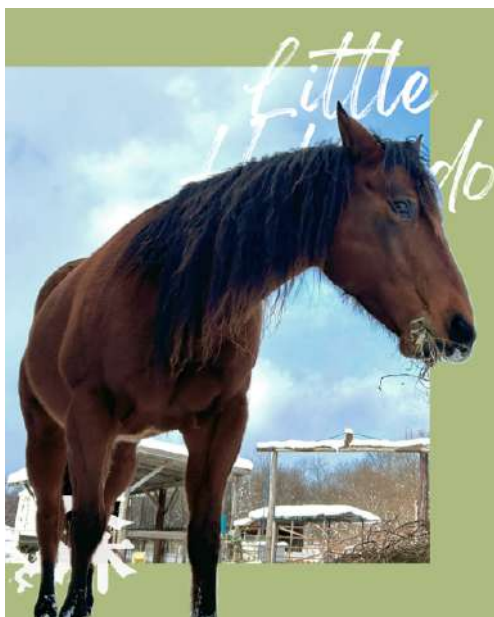
投稿の意図：観光要素をアピール。町内外の人向け。

コメント：一件「森町の魅力を発信してくれてありがとうございます😊。他の街からきた人間だからこそ、感じられる魅力もあると思うし、投稿すっごく楽しみにさせてもらっています🌟」



(6) Sonny's Stable さん(閲覧数: 722 いいね数:46)

投稿の意図：観光要素のアピール。町内外の人向け。



(7) 岩島商店さん(閲覧数:904 いいね数: 40)

投稿の意図：取り組み、お店、観光要素のアピール。町内外の人向け。元地域おこし協力隊の方の活動の紹介。



(8) 雪板(閲覧数:701 いいね数:47)

投稿の意図：森町の暮らしの紹介。町外の人向け。

コメント：一件「私が小さい頃は「さんかくやま」▲と呼んでいた😭懐かしい。」



(9) ラッキーピエロ 赤井川店(閲覧数:738 いいね数:47)

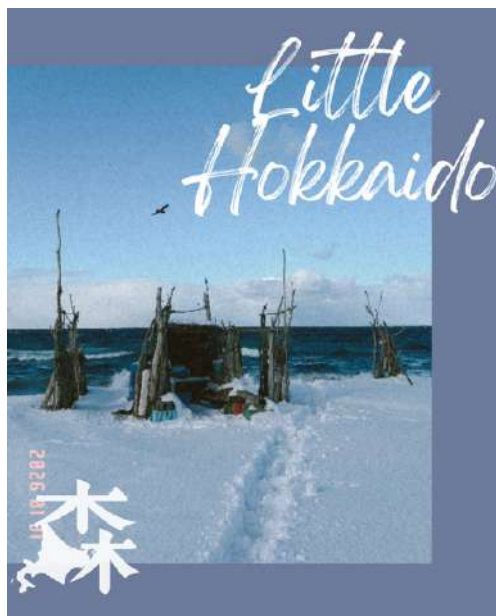
投稿の意図：観光要素、お店の紹介。町外の人向け。

その他：ラッキーピエロ公式アカウントからいいね有。



(10) 砂崎海岸(閲覧数:1453 いいね数:59)

投稿の意図: 観光要素、自然の紹介。町内外の人向け。町内の人でもなかなか行かない、冬の砂崎海岸を紹介。



(11) 雫 barkery さん(共同投稿 閲覧数:1119 いいね数:56)

投稿の意図: 森町の暮らし、お店の紹介。町内外の人向け。



(12) 器ギャラリー 陶稀さん(共同投稿 閲覧数:1004 いいね数:58)

投稿の意図: 観光要素、お店の紹介。町内外の人向け。



(13) クサカ家具店さん(共同投稿 閲覧数:1812 いいね数:83)

投稿の意図: 森町の暮らし、お店を紹介。町内、地域の人向け。

その他: 他の投稿を見て、DM から取材の依頼をくださった。



(14) nuku mori/maru stone-like さん(共同投稿 閲覧数:1131 いいね数:64)

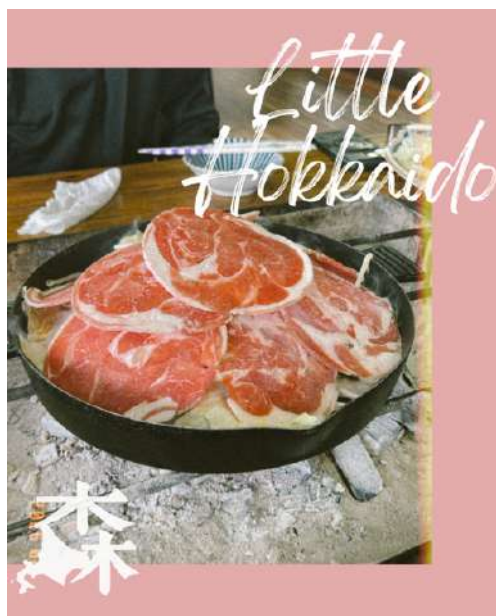
投稿の意図：地域おこし協力隊の方の活動、お店の紹介。町内外の人向け。



(15) 一芳園さん(閲覧数:935 いいね数:64)

投稿の意図：観光要素、お店の紹介。町内外の人向け。

コメント：一件「美味しそう🍷」



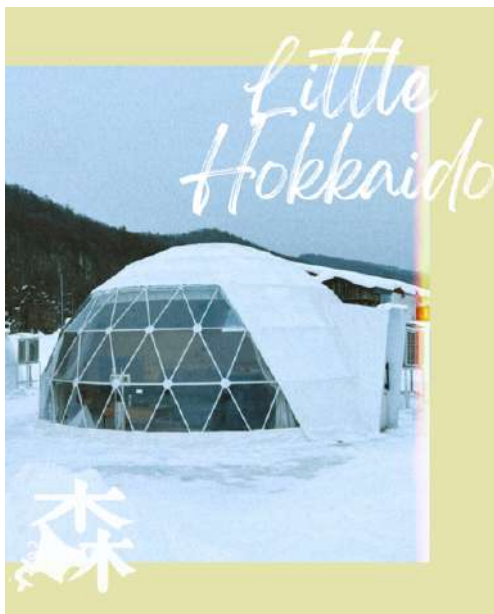
(16) レストラン ケルンさん(共同投稿 閲覧数:1636 いいね数:78)

投稿の意図：観光要素、お店の紹介。町内外の人向け。



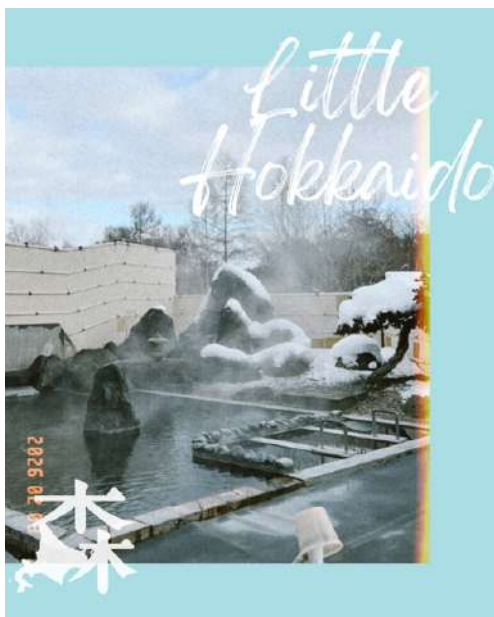
(17) リブマックスリゾート函館 グリーンピア大沼さん(共同投稿 閲覧数:5325 いいね数:119)

投稿の意図：観光要素、宿泊場所の紹介。町外の人向け。



(18) ちゃっぶ林館さん(共同投稿 閲覧数:3223 いいね数:116)

投稿の意図：観光要素、宿泊場所、お店の紹介。町内外の人向け。



(19) ショート動画 森町の魅力(観光協会との共同投稿 閲覧数:1996 いいね数:122)

投稿の意図：観光要素、自然の紹介。町内外の人向け。

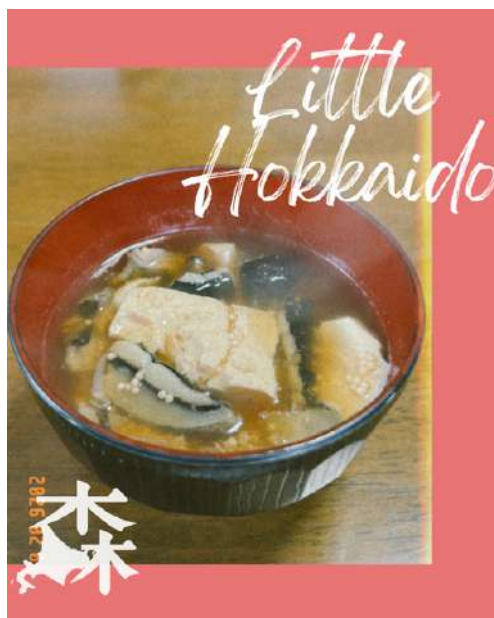
コメント：一件「集大成だ〜!!! ✨最高😊」(協力隊員の方より)



(20) ごっこ汁(閲覧数:715 いいね数: 75)

投稿の意図：森町の暮らしの紹介。町内外の人向け。

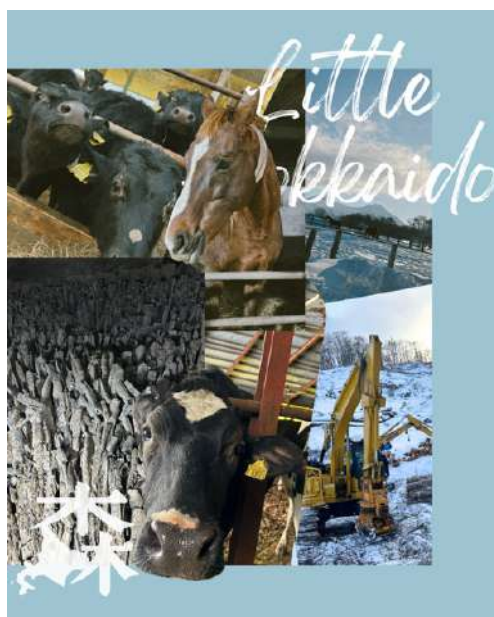
その他:他の投稿の取材でお世話になった方が、水産加工会社の方と繋いでくださり、特別に振舞っていただいた。



(21) ショート動画 森町の魅力 産業編(閲覧数::668 いいね数:50)

投稿の意図：産業の紹介。町内外の人。

コメント：二件「お疲れさまー！最近の森町はすっかり雪も溶けて、春の気配です🌱」（協力隊員の方より）「つくづくいいとこだなあ👍🏔️🌲」



4. まとめ

合計 21 件の投稿を、2 週間という超短期間でアップロードし続けた。短い活動期間ではあったが、数名の町民の方から「見たよ」「すごいね」といった声をいただくことができた。また、20 年以上前に森町に移住してきた方からは「町民は『森には何も無い』と言うことが多い」と残念そうに話されていたが、そのような思いに少しでも応えられるような発信ができたのではないかと感じている。さらに、「ここも取材するとよいのではないかと」と助言をいただいたり、新たな取材先を紹介していただいたりするなど、多くの方に協力していただいた。こうしたやり取りを通して、町の魅力に改めて気づいてもらう一つの機会になったのではないかと感じた。一方で、SNS アカウント名に森町の名称を含めていなかったため、「森町」と検索しても見つけにくいという反省点もある。小さな発信ではあるが、町の中で情報が共有され、町民同士が互いの活動や地域の魅力を知ることによって、地域への理解や愛着が深まっていく可能性がある。そうしたみ重ねが、将来的には人口減少や転出といった地域課題への意識を高めることにもつながるのではないかと感じた。

5. おわりに

今回の活動を通して、多くの方々に支えていただいた。役場の方、取材先の方など多くの方が人と人をつないでくださり、取材先の紹介や地域の方々との交流の機会を広げていただいた。また、週末にも仕事以外の場面で関わってくださる方もおり、地域の方々との交流の中で、これまで経験したことのないことを数多く体験することができた。雪かきなどの日常的な暮らしの一端も含め、このような疑似的な北海道らしの体験は非常に印象深く、忘れることのできないものとなった。森町は、札幌市や函館市といった都市と並び、あるいはそれ以上に多くの魅力に触れることができる町であると感じた。今後も必ず再び訪れ、森町との関わりを続けていきたいと考えている。

令和7年度 地域おこしインターン成果報告書

武蔵野美術大学
クリエイティブイノベーション学科
早坂 瑠花

1. インターン概要

以下の期間において、地域おこし協力隊インターンを実施した。

2026年1月5日(月)~2026年2月28日(土)

活動内容として、以下を実施した。

- (1) 自然豊かな森町での「自給自足」的生活への手がかり探し
- (2) 移住した方に「なぜ森町を選んだのか」をヒアリング

→ 最終アウトプットとして森町でできる暮らし方の提案を1枚のポスターにまとめた。

(なお、アウトプットは森町での暮らしの魅力を最大限、四季に渡り伝えるため、インターン活動中写真のみならず、過去の森町滞在中の写真も用いる。)

2. 活動背景

初めて森町に来たのは、2023年の武蔵野美術大学での産学官連携プロジェクトがきっかけだった。それから通い続け、下記がこれまで森町に滞在した日付である。

《2023年》|9/8~10/9| 《2024年》|7/23~7/25|

《2025年》|3/30~4/5| |5/1~5/5| |6/26~7/7| |8/25~9/6| |9/29~|

《2026年》|~1/28| |2/7~現在|

2025年の3月に卒業制作が完了してからは、特に多く森町に訪れることができた。これほど森町に通い詰めていて、いつも東京へ帰る時には、「帰りたくない」と毎度思わせるものが森町にはあった。

その理由は、私自身が生まれ育った東京と比べて森町は自然豊かで、車移動が主である自由さと、人と介入しすぎない程よい距離感がありながらも、おすそわけ文化や助け合い精神もあり、温かみがあるからだと思っている。森町にはお祭りも多くあり、実際にお祭りを目掛けて滞在期間を決めていたこともある。「自然が豊かで、人も楽しく集まる」魅力のある町だと私は感じている。

今回はそんな私の魅力だと感じた森町の「自然」の面と「人」の面にフォーカスし活動を進めていくことにした。

3. 活動内容

(1) 自然豊かな森町での「自給自足」的生活への手がかり探し

町民の方で、畑や薪割りをして暮らしている方の見学をした際に、自給自足な暮らし方が魅力的だと気が付いた。畑はもちろん、薪棚や、農業用機械の倉庫、蔵も、庭の木を使った自作のもので、新品を買うより金銭的負担が少なく、まさに理想的な自給自足であった。また、私も薪を人生で初めて割らせていただいたり、鉈を使って切った木の小枝を落としてみたりと、体を使う経験をさせていただいた。東京ではジムに行って運動をするが、自然豊かな暮らしでは、生活のための動きさえも運動になってしまう。無駄がなく効率的・合理的に思えた。

そして、海もある森町では釣りもでき、町営の木工施設 iroMori も利用すれば、家具も自分で作ることができるのではないかと。「欲しいものは自分で作る」ような簡易的自給自足的生活の例を提案ができるのではないかと思い、実践と情報収集をした。



写真 1- 町民生活体験薪割り | 写真 2- 漁港での釣りの様子

【自給自足生活案 1- 家庭菜園】

いくつか種を植えてみたが活動期間中に芽が出たのはリンゴの種とレタスの種だった。収穫までは程遠いが、去年と今年も町民の方から畑を貸していただけるので、これからも引き続き育てていきたい。



写真 3- 活動に向け購入した種 | 写真 4- 去年も貸していただいた畑の様子

【自給自足生活案 2- 木工施設 iroMori にて家具の作成】

生活に必要な家具を自らの手で世界に 1 つだけの、自分に最適なものを作れたら、とても魅力的に思える。初心者ながら端材を利用し、棚や時計を作った。



写真 5- 作った棚 | 写真 6- レーザーカッターも使用した時計

【自給自足生活案 3- 養鶏】

養鶏にも興味が湧き、森町で実際に飼っている方に話を聞いたり、自分でも調べたりしてみた。養鶏をゼロから始めるのはハードルが高く感じられるが、昔は全国的にもお祭りでヒヨコを手に入れることができたくらい身近だったそう。卵を産んでくれ、フンは発酵させ畑に施せば栄養分となり、放し飼いにすれば除草効果もある。さらに生ゴミやくず野菜も食べるので、無駄がない。ただし、近所迷惑になる可能性もあるため、広めの土地や、近隣住宅との距離や配慮が必要そう。数羽飼育すれば豊かな暮らしもできそうだと感じ、土地があればいつか養鶏もして生活してみたい。



写真 7- ニワトリ小屋 | 写真 8- いただいた産みたて卵 | 写真 9 放し飼いニワトリ

【自給自足生活案 4- 釣り】

森町に来てから初めて釣りをし、調べながら捌き、調理までした。東京ではいつも、魚料理は手間がかかると感じ調理済みのものを選んでしたが、自分で釣ったものとなると、自然と捌きたくなり、少し自給自足意識も上がったような気がした。



写真 10- 釣った鯖 | 写真 11- 捌いて調理中の鯖 | 写真 12- 釣りのルール

【自給自足生活案 5- 薪ストーブ生活】

自給自足のテーマに決めたきっかけになった町民のお宅は薪ストーブで生活していた。調べると、温風のストーブとは異なり、輻射熱により床や壁までも温め、また乾燥することなく部屋全体を温めてくれるそうだ。また、停電時や災害時にも使え、また灯油高騰などの影響も受けず、魅力的。薪ストーブは森町のお店や他のお宅でもみ見かけるので、実践しやすいかもしれない。またストーブの上で焼き芋を焼いたりパンを温めたりお湯を沸かしたりと、上手な使い方もできる。この方はこれから薪の販売もしていくそうで、資源が豊富だからこそそのビジネスもできそうだ。



写真 13- 通気性や日当たりを考えられた手作りの薪棚 | 写真 14- 薪ストーブ

【自給自足生活案 6- おすそわけ文化】

東京では、あったとしてもご近所付き合いで年に数回のおすそ分け程度だが、森町では高頻度で町民の方々からおすそわけしていただくことが多かった。私たちもそれ

にお返しをする形で関係性が続いている。森町では何人もの方々と物々交換する仲となっているし、市場には出ない豪華なものもいただくことが多かった。これも森町の豊かだと思える点だ。気さくに助け合える心の広さ・優しさも好きな点である。



写真 13- いただいた四年貝(市場に出しているのは2年貝)

写真 14- いただいた昆布 | 写真 15- いただいたマグロの塊

(2) 移住した方に「なぜ森町を選んだのか」をヒアリング

移住したきっかけを聞いて回った結果として、大きく分けて2パターンあり、1つは家族となる人が住んでいたから移住したパターンと、もう1つはアウトドアや自然が好きだから。という回答が得られた。

特にこの2点目からは、森町は海もあり山もあり、近くには湖もあり、アウトドアをしやすい場所であることを、森町の魅力としてもっとアウトドア好きな方や自然が好きの方に向け大きく謳っていけるだろうなと思った。

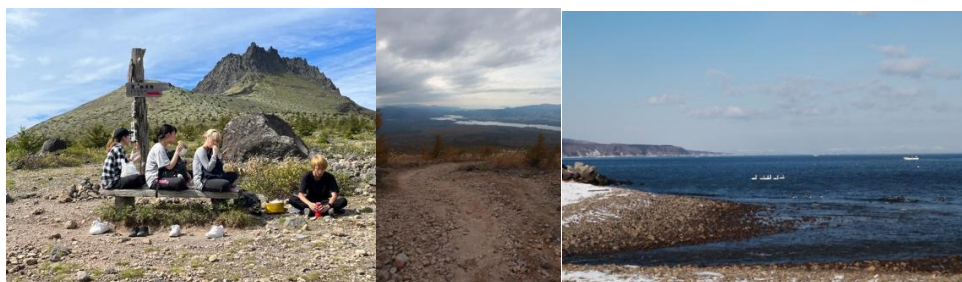


写真 16・17- 駒ヶ岳登山 | 写真 18- 鳥崎川ほとりの噴火湾散歩中白鳥に遭遇

4. まとめ

今回の活動では、

- (1) 自然豊かな森町での「自給自足」的生活への手がかり探し
- (2) 森町に移住した方に「なぜ森町を選んだのか」をヒアリングを行った。

(1)では完全に自給自足とはいかずとも「欲しいものは自分で作る」程度の自給自足は森町で可能であると思った。人間本来の、自分の生活のために忙しいような、そんな豊かな生活をして、自分だけの手作り家具に囲まれながら暮らしたい。私の将来的な理想として、山や庭付きの土地を見つけて養鶏もしながら暮らしたいと思った。

(2)では、アウトドア好きな方にも森町需要が高そうだと気が付けた。これらの気付きの要素もまとめ、森町でできる暮らし方を一枚のポスターにした。(次ページ)

5. 最後に

森町のものを楽しんでほしいと、新鮮な森町産のホタテや野菜をいただいたり、森町のお仕事や暮らしを見学させていただいたり、温かいおもてなし心もあり、優しく迎え入れていただけて嬉しい。今まで短期間滞在で森町を途切れ途切れで楽しんでいたが、ここ数年は森町をメインで過ごす予定だ。これからも森町でたくさん楽しみたい。



写真 19- 駒ヶ岳 | 写真 20- 森町で年越し

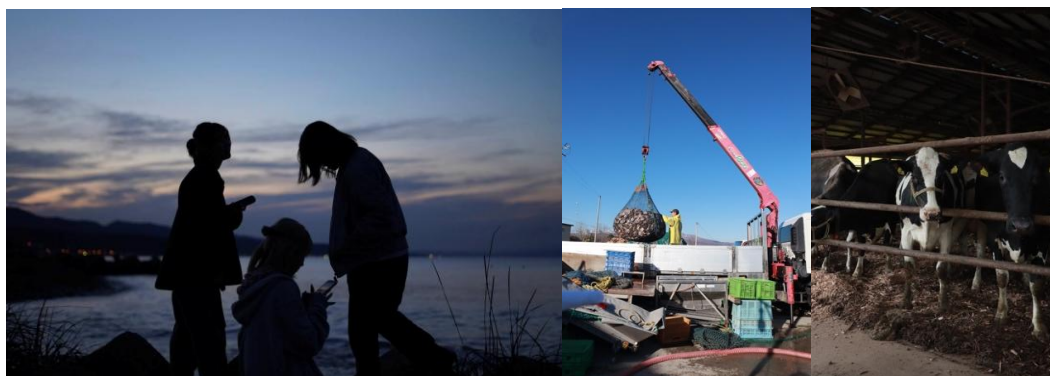


写真 21- 鳥崎川ほとりの噴火湾 | 写真 22- 尾白内ホタテ養殖作業見学

写真 23- 姫川酪農見学

北海道森町の魅力

四年貝才助

みよしの産物

下まひくす

釣った鱈

鱈

駒の岳

養鶏

アヒ

鱈

美味しい!

狩猟

畑

酪農

ヒレシジバネのニガテ

濁川トナリ

アヒ

ヒヤパーター

樹液採取

魚釣り

さしませ輪ど!

秋の森まち茶居

演劇

冬

春

夏

アヒ?

秋

山登り

秋の森まち茶居

紅葉!

緑!

駒の岳

森町太鼓

薪割り

薪ストーブ

床まのあたたか

お祭り

体カ便ウ!

くらりまさとまつり

まつり 森町桜花祭

桜まつり フェアレース!

花火

家具作り

削削

時計

木工機

icofnol i 町営机施設

270°

10